中鳶遺跡（第２次）発掘調査報告

― 津市大里窪田町所在 ―

２００２年３月

三重県埋蔵文化財センター

序

本書でここに報告する中鳶遺跡は、県道建設に伴って三重県埋蔵文化財センターが発掘調査を行ったものです。

遺跡は志登茂（しとも）川を見下ろす北向きの緩やかな斜面にあります。現地での発掘調査は風薫る５月に始まりました。川を挟んで遠くにみえる丘陵の新緑に季節の変化を感じながら、汗ばむ体に初夏の快い風を受けて発掘調査は進みました。

今回の調査では、昔の流路の跡が見つかり、また長い間土の中に埋まっていた土器も見つかりました。何百年もの昔の人が使い込んだ土器を手にして当時の人々の生活に思いを馳せると、しばしの間、時空を超えてタイム・スリップをしたような錯覚にとらわれ、時間の流れ、歴史の流れを感じることができます。

今回の調査では特に大発見があった訳ではありませんが、こうした地道な発掘調査の成果が、三重県の歴史研究の一助になるとともに地域文化の振興に役立つことができれば幸いです。

文末になりましたが、発掘調査にあたりましては、県土整備部公共事業推進課、同部道路整備課、津地方県民局津建設部、そして地元関係者の方々にはひとかたならぬご支援、ご助力を賜りました。心より感謝申し上げます。

平成１４年３月

三重県埋蔵文化財センター

所長　　桂　川　　哲

例　　言

1　本書は、三重県津市大里窪田町字中鳶に所在する、中鳶遺跡の発掘調査報告書である。
2　調査は、平成13年度一般地方道三宅一身田停車場線県単道路改良事業に伴って、緊急発掘調査を実施したものである。
3　調査体制は次のとおりである。
　調査主体　三重県教育委員会
　調査担当　三重県埋蔵文化財センター（調査第１課）
　　主幹　河北秀実、主査兼係長　野原宏司、技師　萩原義彦、主事　黒田聖也
　　研修員　伊藤直孝、新庄孝敏、山﨑博史、松見直茂
4　本書の編集・執筆は河北、黒田、伊藤、新庄、山﨑、松見が行い、執筆分担は目次および文末に記した。
遺構・遺物写真は萩原、黒田、伊藤、新庄、山﨑、松見が撮影した。
5　調査地は国土座標Ⅵ系に属する。挿図の方位はすべて座標北で示している。
なお、磁北は西偏６°４０′（平成９年）である。
6　当報告書での遺構表示略記号は、以下の通り統一した。
　ＳＤ……流路　　ＳＫ……土坑
7　本書で報告した記録類及び出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。
8 スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本　文　目　次

Ⅰ　前言……河北・山﨑・新庄・黒田……1
Ⅱ　位置と歴史的環境……伊藤……2
Ⅲ　土層と遺構……松見・新庄・伊藤・山﨑……6
Ⅳ　遺物……黒田・伊藤・新庄・山﨑・松見……8
Ⅴ　結語……黒田・伊藤・新庄・山﨑・松見……10

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図……3
第２図　遺跡周辺地形図……4
第３図　調査区位置図……4
第４図　土層断面図……6
第５図　遺構平面図……7
第６図　出土遺物実測図……9

表　目　次

第１表　遺物観察表……11

写　真　図　版　目　次

ＰＬ１　調査前風景（南から）・調査区全景（北から）……12
ＰＬ２　ＳＫ１・ＳＤ３……13
ＰＬ３　出土遺物……14

Ⅰ　前　言

1　遺跡の登録と調査歴

中鳶遺跡については、比較的古くから土器が採集されており、遺跡として認識されている。大里小学校体育館建設に伴って、昭和50（1975）年に津市教育委員会によって発掘調査が実施され、この時に津市遺跡番号477として登録された。発掘調査では、弥生時代から平安時代までの遺構や遺物が多数確認されている。時期的には、今回の発掘調査によって確認された遺物とほぼ一致する

2　調査に至る経過

平成２年度に三重県土木部道路建設課から津市大里地内で一般地方道三宅一身田停車場線県単道路改築事業の計画が提示された。これを受けて三重県埋蔵文化財センターでは、現地確認を行った結果、中鳶遺跡に隣接しているため、その取り扱いについて継続協議をすることとした。

平成８年度に工事図面完成に伴い、埋蔵文化財センターが分布調査を実施した結果、事業地は中鳶遺跡の西端にかかることが判明したため、試掘調査が必要となった。試掘調査は平成10年３月に実施したが、遺構・遺物とも確認されず工事施工可と判断した。

平成10年度には、遺跡範囲外についても分布調査を実施した結果、遺物の散布が認められたため試掘調査の必要があると判断した。第２回目の試掘は平成13年３月に実施したが、４箇所の試掘坑のうち試掘坑№１で縄文時代の土坑１基を検出したため400㎡の範囲において本発掘調査が必要となった。

3　調査の経過

本調査は、遺跡面積40,000㎡のうち当事業により削平される400㎡について実施した。発掘調査は、平成13年５月16日から開始し、６月５日に現地作業を全て完了した。調査区は標高差３ｍ前後という条件下で、湧き水により水が溜まりやすく掘削の妨げとなった。降水時には周囲の雨水が調査区内に流れ込み、翌朝はポンプを稼動しての排水作業から始まった。また、大雨の後は調査区西壁が崩壊するなどした。

このような悪条件にもかかわらず、大きな問題もなく調査を終了することができたのは、作業員各位の御努力のお陰である。ここに心からの御礼を申し上げる。

〔調査日誌抄〕

５月11日	発掘用具の搬入、調査前風景・遺跡遠景写真撮影、調査区の設定
５月16日	重機による表土掘削を開始、サブトレンチ、掘削（調査区東側壁面）
５月17日	重機掘削続行、調査区東壁面分層作業
５月18日	重機掘削続行（調査区西半分）地区杭設定（Ａ～Ｆ、１～７）
５月21日	人力掘削作業開始、須恵器、山茶碗片出土するも遺物は全体的に少ない 作業風景写真撮影
５月24日	降雨のため現場作業中止
５月25日	重機（調査区西側から中心部）・人力（北・東・南）掘削続行
５月28日	包含層掘削、遺構検出、ＳＫ１・ＳＫ２の掘削、遺構平面図作成
５月29日	包含層掘削清掃、遺構検出、写真撮影作業員終了
５月30日	写真撮影、午後降雨の為現場作業中止
６月１日	遺構の実測
６月４日	遺構の実測、遺構レベル測定 土層図作成（調査区東側・南側壁面）
６月５日	遺構レベル測定、土層図作成続行 発掘用道具の片づけ及び撤収

4　調査の方法について

a　調査区の設定について

調査区は４ｍ四方の升目で切ることによって設定した。概ね西から東にアルファベット（Ａ～Ｆ）、北から南に数字（１～７）を付け升目の北西隅の交点をその調査区の表示とした。

b　掘削の方法について

調査は、表土を機械掘削で行うことにより、迅速化に努め、その後の遺構検出、遺構掘削は人力により行った。

c　排水について

低地であるため、調査には常に水に悩まされた。そのため調査区の付近に発電機を置き、それによって排水ポンプを稼働させた。

d　遺構図面について

調査区の土層断面図と平面図は、1／20縮小で実測作成した。

註

(1)　萱室康光『中鳶遺跡発掘調査報告』　津市教育委員会1977

5　文化財保護法等にかかる諸通知

文化財保護法（以下、法）等にかかる諸通知は、以下により県教育長等宛に行っている。

・法に基づく三重県文化財保護条例第48条1項

（県教育長宛）

平成13年4月20日付け道整第43号

（県知事通知）

・法第58条の2第1項（県教育長宛）

平成13年5月14日付け教埋第49号

・遺失物法による文化財発見・届出通知

（警察署あて）

平成13年6月18日付け教ス生第8－3号

（県教育長通知）

II　位置と環境

1　地形的環境

①中鳶遺跡は、三重県津市大里窪田町字中鳶内に所在する。

中鳶遺跡は、志登茂川流域に相当する地域で、志登茂川の中流部右岸の河岸段丘上に広がる遺跡である。志登茂川が開析した平野は、狭く、海岸寄りの低地部は常に洪水の影響を被ってきた。

2　歴史的環境

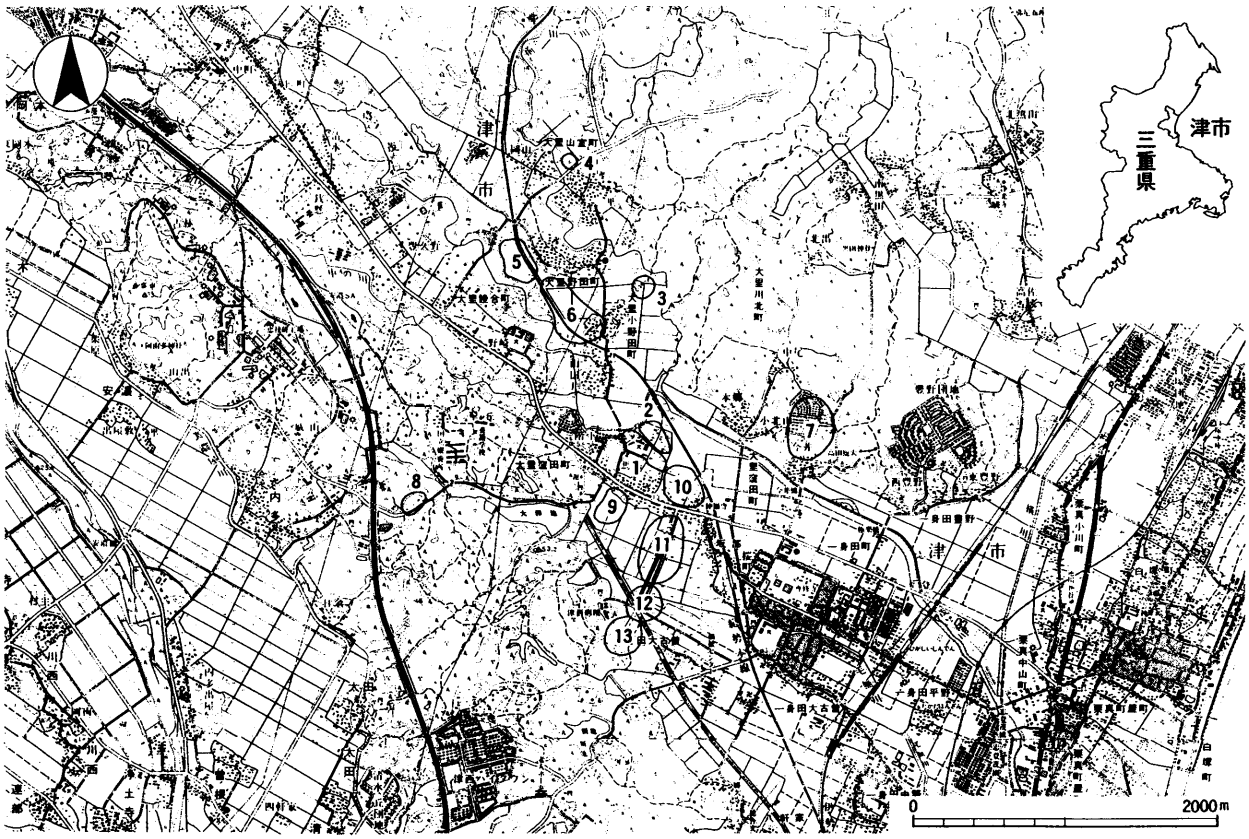
志登茂川流域の最古の人間活動の痕跡は、先土器時代末まで遡る。中鳶遺跡の南、見当山丘陵の北側端部に所在する津市一身田の⑬大古曽遺跡[1]や志登茂川を望む台地上に立地する津市大里窪田町の⑪六大B遺跡[2]では、ナイフ形石器の出土がある。量的には少ないが、低地部を見下ろすやや小高い台地上に当時の生活拠点があったようである。

縄文時代に入っても、津市大里野田町の③東浦遺跡[3]での草創期の木葉形尖頭器の出土や④小谷遺跡[4]での早期末条痕文系土器の出土、⑫橋垣内遺跡[5]や芸濃町赤坂遺跡[6]での早期押型文土器の出土など断片的な資料が知られる程度で、縄文時代の草創期や早期といった古い時期の遺跡確認は今のところ県内他地域と比べると低調である。今後の確認例の増加が待たれる。

縄文時代の中期でも後半以降になると、関東系の加曽利E式系統の土器の流入とともに、当地の縄文遺跡は、次第に活発化していく。志登茂川左岸の台地上に所在する津市大里野田町の⑥大里西沖遺跡[7]や丘陵を越えた安濃川流域の芸濃町大石遺跡[8]では、中期末の竪穴住居が確認されている。この時期は、県内各地で遺跡数が増加に転ずる時期であり、この時期以降、当地域も徐々に発展しながら遺跡形成が進むものと見られ、まだまだ遺跡の発見数は少ないものの、後晩期もこの流れで捉えてよいと思われる。

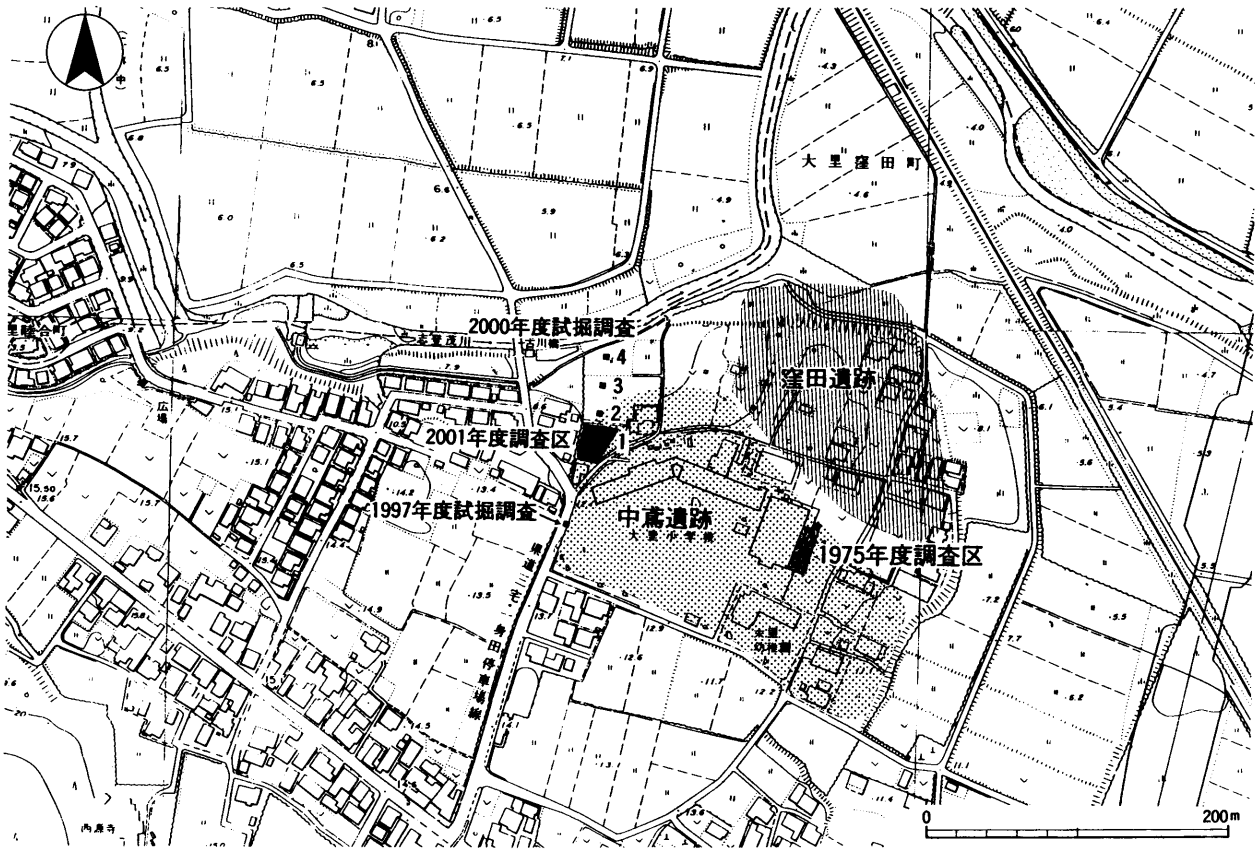
弥生時代になると、橋垣内遺跡で中期の方形周溝墓や土坑墓が発見されているが、志登茂川流域での弥生墓制の発見は、これまで弥生末～古墳前期の⑦川北遺跡[9]しか知られておらず、弥生時代中期の遺跡自体も今のところあまり有力なものはない。

古墳時代に入ってもこの状況は同様に、志登茂川流域では小規模古墳は認められるものの、前方後円墳等の首長墓に属する古墳は見られない。しかし、

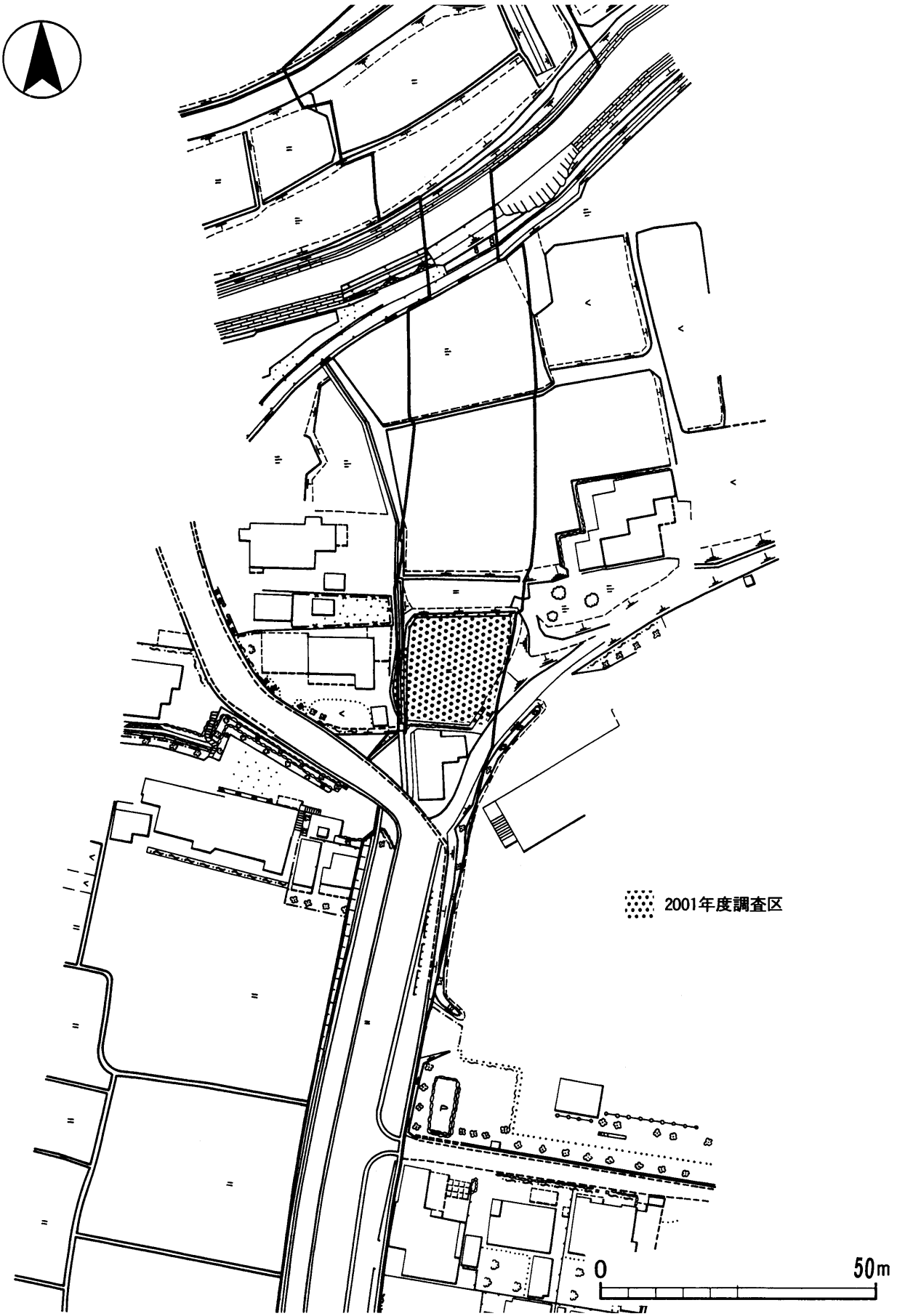


①中鳶遺跡　②窪田遺跡　③東浦遺跡　④小谷遺跡　⑤若林遺跡　⑥大里西沖遺跡　⑦川北遺跡　⑧内多古窯跡　⑨安養院遺跡
⑩六大Ａ遺跡　⑪六大Ｂ遺跡　⑫橋垣内遺跡　⑬大古曽遺跡

第１図　遺跡位置図（１:50,000）（国土地理院「椋本」・「白子」・「津西部」・「津東部」１：25,000）



第２図　遺跡周辺地形図（１：5,000）津都市計画基本図No.12・108（1996年度撮影）より



第３図　調査区位置図（１：1,000）

⑩六大A遺跡では[10]地域首長によって執行された古墳時代の大規模な祭祀場であったことが判明している。

また、初期須恵器・韓式系土器が提起する問題もある。今津啓子氏の韓式系土器出土遺跡の分類[11]によると、「極めて高い確率で渡来人の居住を推定できる集落」と指摘されている。初期須恵器についても、調整の特徴や焼成具合から、在地で焼かれた可能性の高いものもあり、どこかに当該時期の窯跡が存在していた可能性があると思われる。

律令時代には、志登茂川流域は、奄芸郡に編入される。志登茂川流域は、奄芸郡のなかでは最も南側の地域ということになるだろう。平城宮跡出土の木簡には「伊世国奄伎郡」（表）「久菩多里私部小□□」（裏）といった墨書の残るもの[12]も存在しており、当地域と畿内中央部との交渉の一断面がよく知られている。

中勢道路建設に伴って発掘調査された遺跡群、南から大古曽遺跡、橋垣内遺跡、六大B遺跡、六大A遺跡[10]は、県道建設に伴って発掘調査された大垣内遺跡とともに、古代奄芸郡南部の様相の一端を明らかにしつつある。8世紀末頃より顕在化する掘立柱建物による集落の成立を受け、六大B遺跡では木簡が出土するなど下級官衙あるいは富豪層の居館と推定されており、大型掘立柱建物や多量の緑釉陶器の存在とともに、奄芸郡の中心地の一画であったことが予想される。中鳶遺跡の東に隣接する六大A遺跡（1994～1996年度調査）でも、蹄脚硯や暗渠排水を伴った建物の存在を予想させる土管の出土など、当地域の発展の様子を示している。

中世以降も、当地域は衰退することなく、安定して集落が継続し、「伊勢別街道」も次第に整備されてきて、中世後期には県内最大の寺院である一身田専修寺の前身となる寺院も成立する。

今後は、今回の中鳶遺跡を含め、以上のような成果を受けて、当地域の歴史的発展の様子を具体的に明らかにしていく作業が望まれる。

註

(1) 山口格ほか「大古曽遺跡」『一般国道23号中勢道路建設事業に伴う大古曽遺跡・山篭遺跡・宮ノ前遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　1995

(2) 本堂弘之「Ⅲ　調査の成果」『一般国道23号線中勢道路（9工区）建設事業に伴う六大B遺跡（A地区）発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　1999

(3) 清水正明・小林秀「Ⅱ　津市東浦遺跡ほか」『東浦遺跡・椋本南方遺跡ほか』三重県埋蔵文化財センター　1993

(4) 清水正明「Ⅱ　津市東浦遺跡ほか」『東浦遺跡・椋本南方遺跡ほか』三重県埋蔵文化財センター　1993

(5) 本堂弘之ほか「Ⅲ　発掘された遺構と遺物」『一般国道23号線中勢道路（9工区）建設事業に伴う橋垣内遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　1997

(6) 伊藤克幸『安芸郡芸濃町赤坂遺跡発掘調査報告書』三重県埋蔵文化財センター　1991

(7) 伊藤裕偉・穂積裕昌「Ⅱ　津市大里地区内遺跡群」『平成3年度農業基盤整備地域埋蔵文化財発掘調査報告第1分冊』三重県埋蔵文化財センター　1992

(8) 伊藤徳也・森川幸雄「Ⅲ　安芸郡芸濃町大石遺跡」『平成3年度農業基盤整備地域埋蔵掘調査報告　第1分冊』三重県埋蔵文化財センター　1992

(9) 「Ⅲ　緊急調査の現状」『三重県埋蔵文化財年報15』三重県教育委員会　1985

(10) 穂積裕昌・山本義浩「Ⅲ　六大A遺跡」『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報Ⅷ』三重県埋蔵文化財センター　1996

(11) 今津啓子「渡来人の土器」『ヤマト王権と交流の諸相』名著出版　1994

(12) 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査出土木簡概報』12　1978

Ⅲ　土層と遺構

1　土層

調査区は河岸段丘が北西方向に落ち込んだ部分に位置し、標高９ｍ前後でありもとは水田である。

基本層序は褐灰色粘質土（断面図１層）、灰黄褐色土（同２層）、明黄褐色砂質土（同４層）のいわゆる地山である。

2　遺構

今回の調査では、調査面積が400m²と狭く、土坑２基と流路１条を検出した。以下にその遺構について述べる。

（１）縄文時代

ＳＫ１

Ｄ３区で土坑を検出した。土坑の規模は、ほぼ円形で径0.8m、深さ0.4mである。埋土は黒色土で、遺物は縄文土器深鉢の小片が３点（頸部１点、底部２点）出土している。

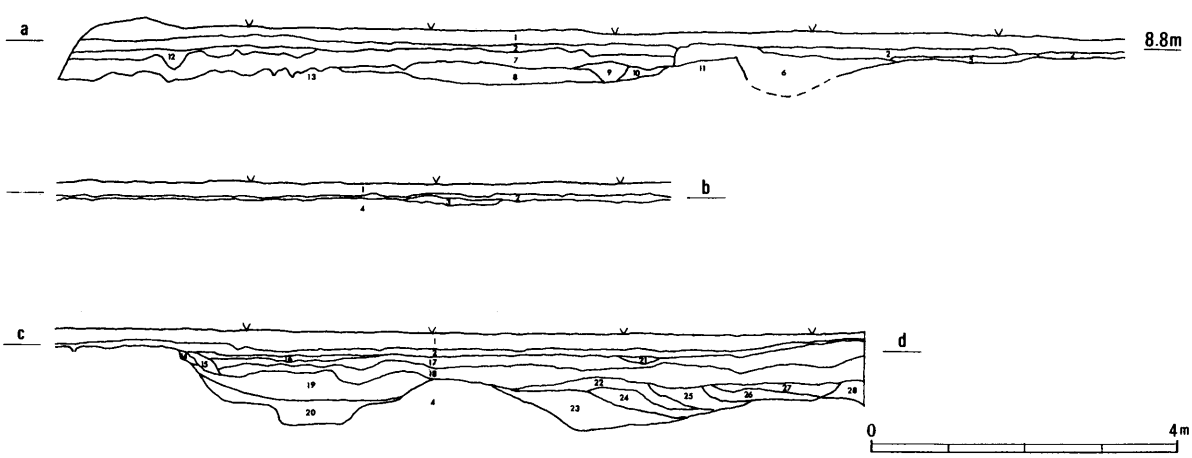
ＳＫ２

Ｃ３区の流路端で土坑を検出した。土坑の規模は、長径（東西方向）が１ｍ、短径（南北方向）が0.8ｍの楕円形である。遺物は出土しなかったが、埋土はＳＫ１と同じ黒色土であるため、同時期とした。

（２）中世

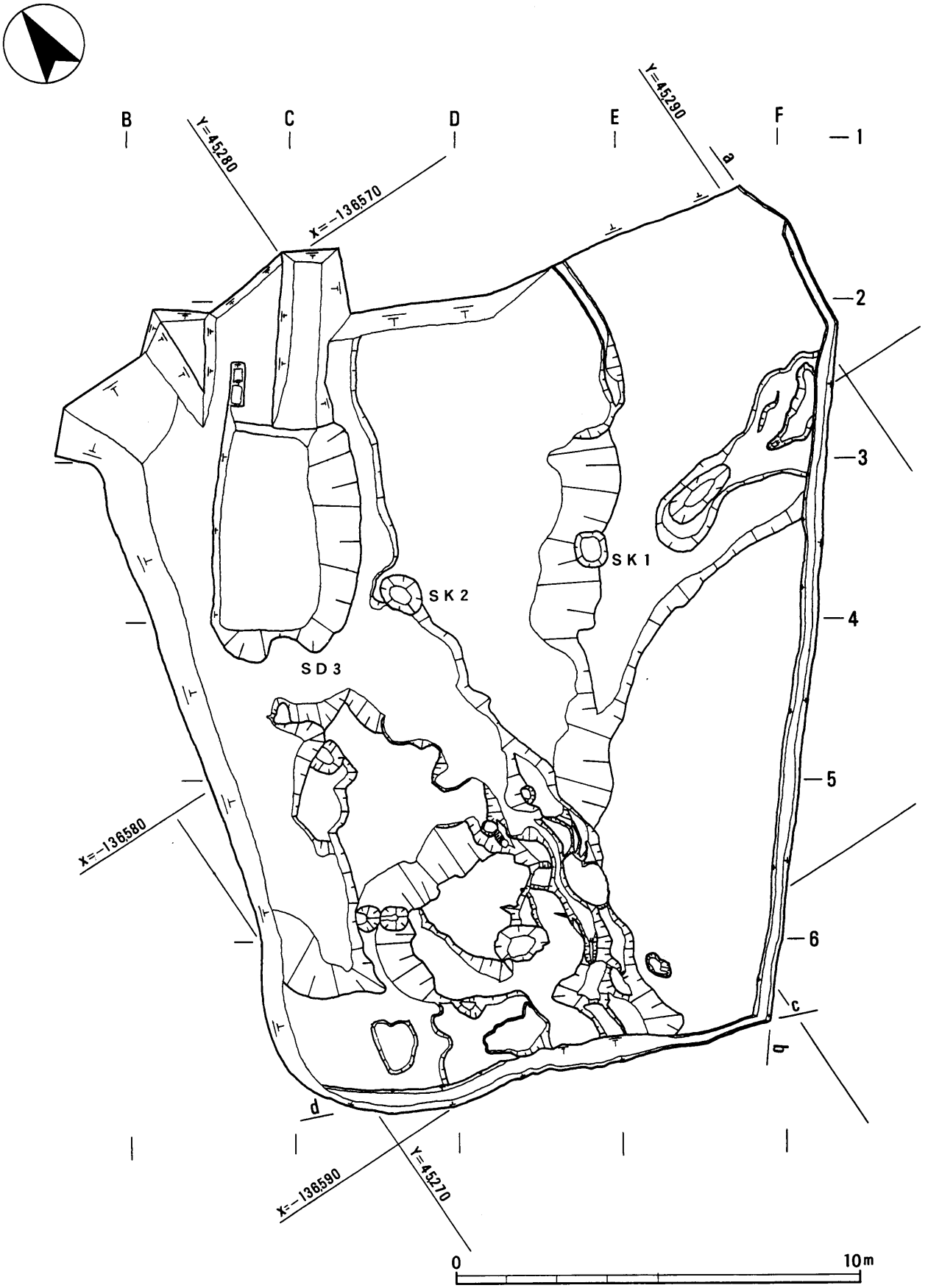
ＳＤ３

調査区の西側南から北（Ｃ・Ｄ６区～Ｂ・Ｃ２区）にかけて流路を検出した。流路は南端（Ｄ６区）では１本ではあるが、すぐに北と西に分岐し複雑に流れている。その後またＢ３区で１本に収束し、１ｍ以上落ち込んでいる。調査区外に掛かる為、全体を検出できなかったが、流路の中央部（Ｂ・Ｃ４区）では幅約５ｍ以上、深さ約１ｍであり、断面はＵ字形である。埋土は、黒褐色土（断面図19層）、黒色土（同20層）である。出土遺物は土師器、須恵器、山茶椀、青磁椀の小片で、上流からの流れ込みの可能性が高い。



1　褐灰色粘質土（水田跡）10YR4/1
2　灰黄褐色土（水田床土）　10YR4/2
3　浅黄色砂質土　2.5Y7/4
4　明黄褐色砂質土（地山）（鉄分含んで酸化）　2.5Y7/6
5　灰黄色砂質土　2.5Y7/2
6　オリーブ黄色砂質土（礫多いφ５cm前後）5Y6/4
7　オリーブ褐色砂質土（礫多いφ３cm前後）2.5Y4/6
8　暗オリーブ褐色砂質土　2.5Y3/3
9　オリーブ褐色砂質土（礫多いφ３cm前後）2.5Y4/3
10　灰オリーブ色砂質土　5Y5/3
11　灰オリーブ色粘質土（地山）　5Y6/2
12　黒褐色砂質土　10YR3/1
13　明褐灰色砂質土（地山）　7.5YR7/2
14　黒色土（４の砂混じり）　5YR1.7/1
15　極暗赤褐色土　5YR2/3
16　赤黒色土　2.5YR1.7/1
17　極暗赤褐色土　2.5YR2/3
18　黒褐色土　7.5YR2/2
19　黒褐色土（礫多い）　10YR3/2
20　黒色土（酸化している　礫含む）10YR2/1
21　暗赤褐色土（礫含む）　5YR3/4
22　黒褐色砂質土（礫含む）　2.5Y3/1
23　明黄褐色砂質土（小石含む）2.5Y6/6
24　黒色土　2.5Y2/1
25　暗赤褐色砂質土　2.5YR3/3
26　黒色土（礫多い）　7.5YR2/1
27　黒褐色土　7.5YR3/2
28　褐色土　7.5YR4/3

第４図　土層断面図（１：100）



第5図　遺構平面図（1：150）

Ⅳ 遺 物

1 縄文時代

縄文土器 深鉢（1～6）

1～3は、ＳＫ1より出土した。1の外面は撚糸文を地文とし、半截竹管状工具による平行沈線文を施している。内面は、ナデ調整。里木Ⅱ式併行期[1]であろう。2は底部で、外面はナデ調整、内面は剝離しており調整は不明である。3も底部で、内外面ともナデ調整されている。2・3は、1と共伴していることから、同時期として大過ない。

4～6は、包含層等より出土した。4は外面に撚糸文を施し、内面はナデ調整されている。1と同時期と考えられる。5は外面に縄文を施し、内面はナデ調整されている。摩滅が激しく、時期等の特定は避けておく。6は外面に二枚貝によるものと思われる条痕を施し、内面はナデ調製されている。後期の可能性を指摘しておく。

2 古墳時代

土師器 甕（7）

ＳＤ3より出土した。古墳時代のＳ字状口縁をもつ台付甕の台部である。外面にハケメが施され、内面にも細かいハケメが施される。色調はにぶい橙であり、胎土は粗い。脚台片のみであるが、薄手でハケメがやや細かいことから、山田編年[2]のＣ類にあたり、5世紀前葉であると考えられる。

須恵器 坏蓋（8）

天井部は一部欠損しているが、天井部と口縁部との境界に浅い沈線がある。天井部は緩やかに外方に開き、口縁端部は内面に面を持つ。概ね田辺昭三氏による陶邑編年（以下、田辺編年[3][4]）のＴＫ209に相当すると思われ、6世紀後半から7世紀前葉の時期にあたる。

須恵器 坏身（9）

底部は一部欠損しているが、丸みをおびる。たちあがりは、やや内傾し、端部に面をもつ。受部はやや上方にのびている。田辺編年のＭＴ15からＴＫ10（6世紀初頭～中葉）に相当すると考えられる。

高坏（10）

脚柱のみが残存しており、「八」の字を描くように緩やかに外方に広がっている。

須恵器 甕（11～14）

11は須恵器甕の口縁部片、12～14は胴部片と思われる。11はロクロナデの後、口頸部に直線文の跡が見られる。12～14は成形過程においてできた叩き目が内外面に見られる。12・13の外面は格子叩き、14は平行叩きが施され、内面はいずれも同心円スタンプの文様がのこる。

3 中 世

15～35はＳＤ3から出土した。36～40は遺構検出時に出土したが、ＳＤ3からのものとみて大過ない。41は、調査区隣接地からのものである。

土師器 小皿（15）

径7.8cmで器高1.0cmのごく浅い小皿である。口縁端部はヨコナデ調整されており内面はナデ調整されている。底部外面はオサエによる凸凹が見られる。胎土は粗く、色調は橙である。

土師器 鍋（16）

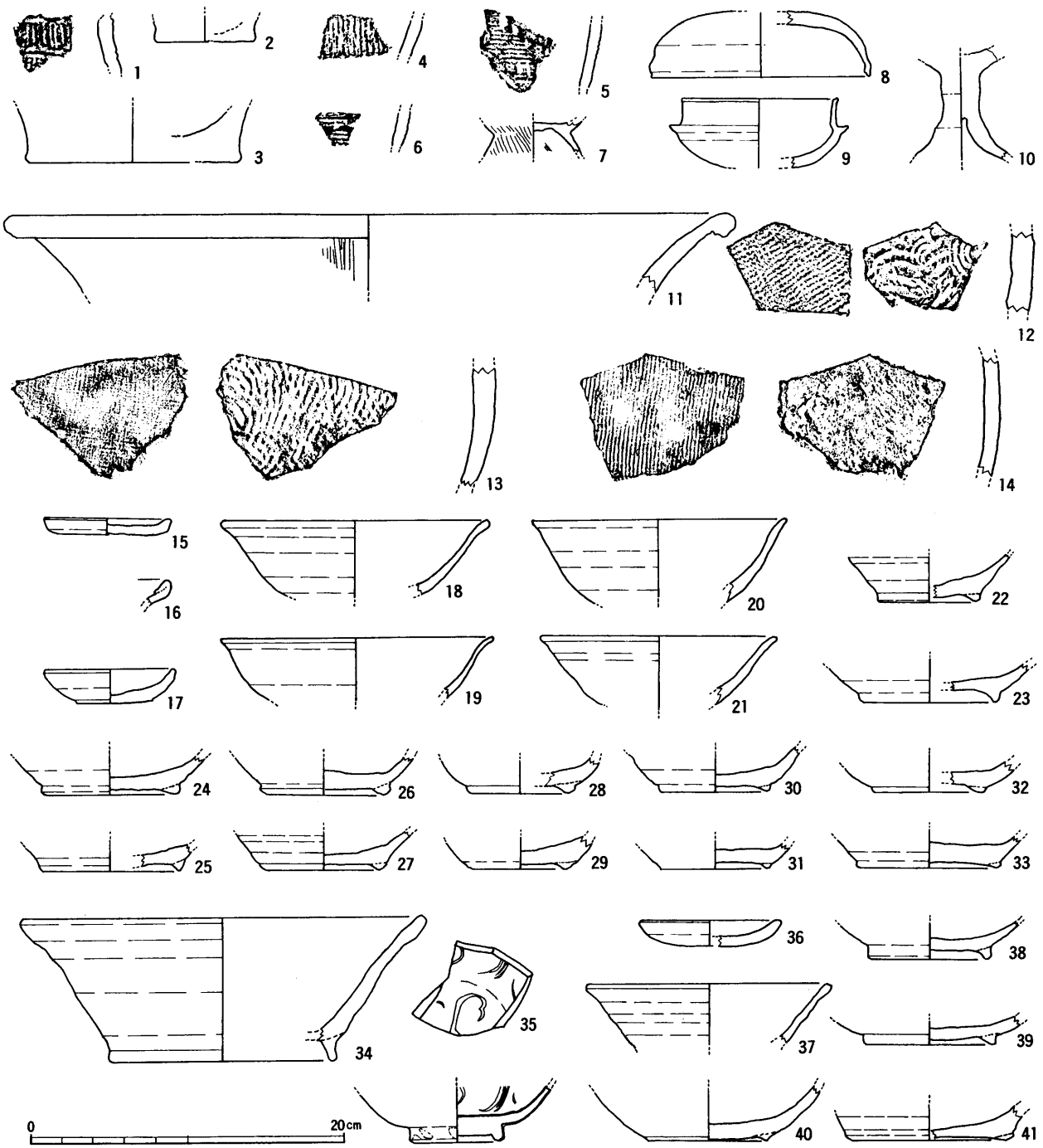
16は、外反する口縁部から口縁端部は内へ折り返す鍋の口縁部である。口縁部内外面ともヨコナデ調整されており、口縁端部内側は面をつくる。橙色を呈し、胎土は粗い。折り返し形状は、伊藤分類[5]～[9]の第1段階に類似し、13世紀初頭から後葉のものだろう。

陶器 山皿（17）

口径8.1cm、底径5.0cmの山皿である。口縁部は1／3程度残存する。底部は平底であるが、若干突出する。体部は内外面ともロクロナデで、底部には糸切り痕が見られ、藤澤編年[10][11]における第5～6型式とみられる。

山茶椀（18～33）

完形品は、1点もないが、判別できる個体については、体部は内外面ともロクロナデ、底部は糸切り痕が見られ、高台貼り付け及び貼り付け後ナデの技法が用いられている。又、高台には、モミガラ痕が認められる。19, 21, 23, 32, 33については自然釉、32については、重ね焼き痕が認められる。藤澤編年[10][11]



第6図　出土遺物実測図（1：4）

における第5～6型式の特徴が見られる。

陶器　鉢（34）

口径25.4cm、器高9.0cm、高台径14.0cmの練り鉢で、体部は内外面ともロクロナデで、体部下方をヘラ削りし、高台貼り付け後ナデる。自然釉が見られる。

磁器　青磁椀（35）

底部の器肉が厚く、高台は断面四角で削り出し高台である。内面に草花文を片彫りしている。内面全体と体部外面に緑色を主体とした釉を施す。高台畳付部は、釉が削り取られた跡が見られるが、高台内部は施釉されていない。横田・森田[12]編年における竜泉窯系青磁椀Ⅰ類2と思われる。

土師器　小皿（36）

口径8.4cmの小皿である。口縁端部のみヨコナデ調整されており、内面はナデ調整されている。底部

外面はオサエによる凸凹が見られる。胎土は粗く、色調は黄橙である。

陶器　山茶椀（37～41）

流路ＳＤ３出土の山茶椀と同じような特徴を持つが、完形品はない。

註

(1) 泉拓良「船元・里木式土器様式」『縄文土器大観』小学館 1988
(2) 山田猛「Ⅲ　山城遺跡」『山城・北瀬古遺跡』三重県埋蔵文化財センター　1994
(3) 田辺昭三『須恵器大成』角川書店　1981
(4) 田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ　1966
(5) 伊藤裕偉「南伊勢系土師器の展開と中世土器工人」『研究紀要第１号』三重県埋蔵文化財センター　1992
(6) 尾野善隆「中世食器の地域性」『東海・濃飛国立歴史民族博物館研究報告第71集』　1997
(7) 『一般道路１号線亀山バイパス埋蔵文化財発掘調査概報Ⅵ』三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター　1990
(8) 『三重県埋蔵文化財報告60　昭和57年度農業基盤整備事業地域　埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会　1983
(9) 『三重県埋蔵文化財報告108－１東浦遺跡・椋本南方遺跡ほか』三重県埋蔵文化財センター　1993
(10) 藤澤良祐「瀬戸古窯址群Ⅰ」『研究紀要Ⅰ』瀬戸市歴史民俗資料館　1982
(11) 藤澤良祐「山茶椀研究の現状と課題」『研究紀要第３号』三重県埋蔵文化財センター　1994
(12) 横田賢次郎・森田勉「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集４』　1978

結　語

今回の一身田線停車場県道道路改良工事に伴う中鳶遺跡の第２次調査は、400㎡という小面積ではあったが、志登茂川流域における重要な位置を占めている遺跡として注目されるものであった。中鳶遺跡は、第１次調査の結果から弥生時代後期から平安時代中期に至る集落跡で、古墳時代が中心と考えられていた。今回の２次調査では、縄文時代後期から中世までの遺物を確認することができ、長期にわたって営まれてきた遺跡であることがわかった。

縄文時代については、後期の深鉢が出土したが、全体を知ることのできる遺物はなく、また遺構も土坑ＳＫ１、ＳＫ２のみであった。住居跡を確認することはできなかったが、当遺跡が縄文時代後期まで溯ることが判明した。

弥生時代にも遺跡が展開していたことが第１次調査[(1)]で確認されているが、今回の調査では弥生時代の遺物は確認できなかった。

古墳時代の遺物は、５世紀前葉の土師器台付甕、６～７世紀の須恵器杯、甕等が出土しているが、後世の流路ＳＤ３に混入していたものである。

中世の遺物については、流路ＳＤ３から土師器、山皿、山茶椀、青磁椀等の遺物が出土し、当遺跡が中世まで存続していたことがわかった。流路出土の遺物は決して多くはないが、山皿、山茶椀については13世紀中葉までにおさまるものであり、流路は13世紀以後に埋没したものと思われる。

中鳶遺跡は、大里小学校を中心とする東西250m×南北100mの段丘上の遺跡であるが、今回の調査区は、周知の遺跡範囲のさらに西側の小さな谷が入り込んだ場所である。発掘調査により流路を検出したが、この流路が遺跡のほぼ西端であり、今回の第２次発掘調査では、中鳶遺跡の西端部を確認できたと考えてよいだろう。中鳶遺跡の北には窪田遺跡が隣接しているが、同じ段丘上であり、遺物も連続して散布していることから一連の遺跡と考えてよいであろう。なお、窪田遺跡の西側の畑地にも遺物の散布が見られるので、中鳶遺跡を含めた一連の遺跡を明らかにしていくには、今後の発掘等の調査に期待したい。

註

(1) 萱室康光『中鳶遺跡発掘調査報告』津市教育委員会　1977

遺物観察表については、以下のような方法によって表記している。
番　　号：図版に対応する番号である。
実測番号：実測図作成段階での番号である。
器 種 等：須恵器、土師器、山茶椀などの別と，器種（鉢・甕・鍋）などを記した。
小 地 区：調査区内のグリッドである。
遺 構 名：遺構から出土したものについては遺構を表記した。
計 測 値：底径、高台径、器高、口径について記した。
調　　整：技法などの特徴：土器の調整過程において生じた事項について簡単に記した。その他、特徴的な事項については特記事項に記した。
色　　調：「新版標準土色帖」（小山・竹原編　19版　1997）を基準とした色調及びＪＩＳ標準色票を記した。
残 存 度：口縁・高台・体部等の残存の度合いを分数で表記した。

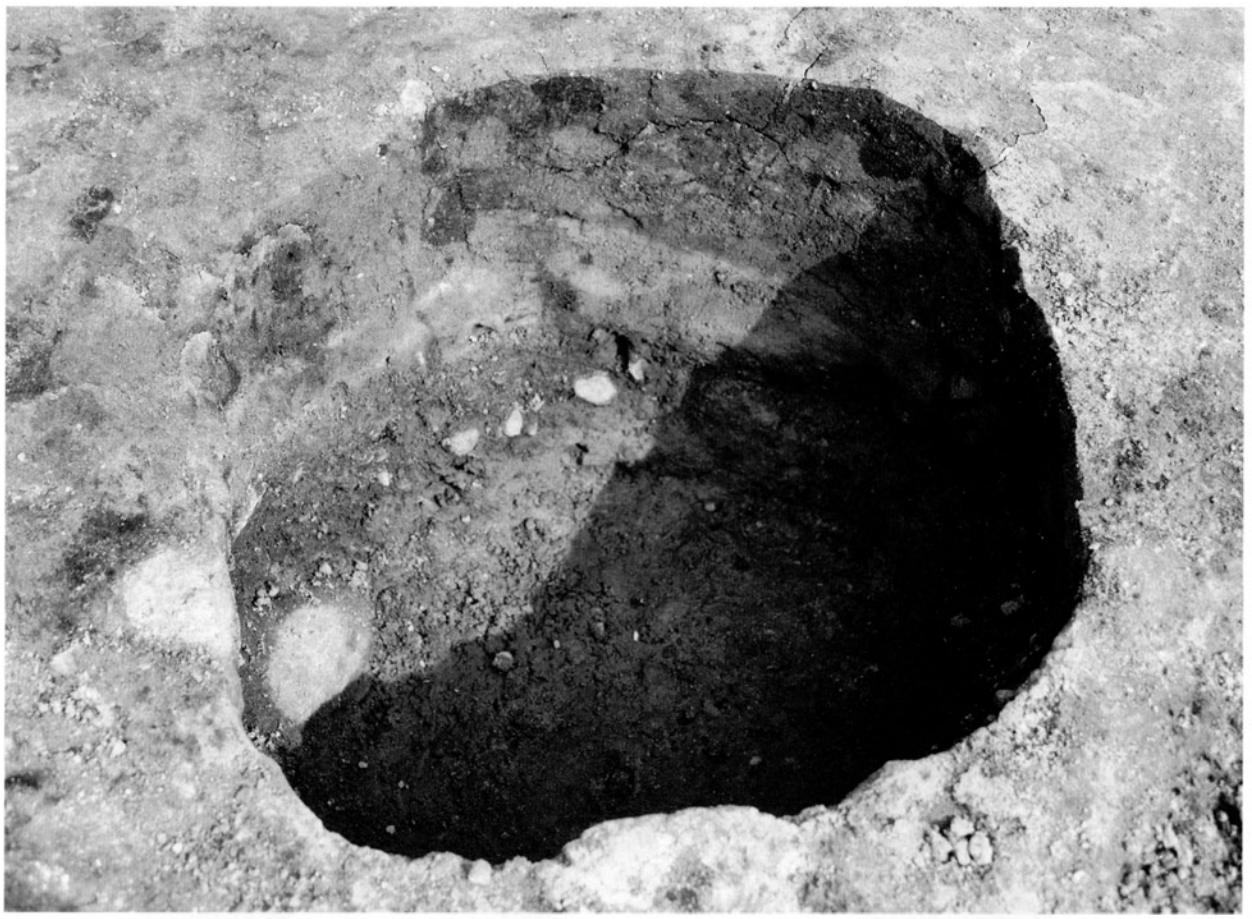
番号	実測番号	器種等	小地区	遺構名	計測値（cm）	調整・技法などの特徴	色調	胎土	焼成	残存度	特記事項
1	001−10	縄文土器 深鉢	D3	SK1		内ナデ 平行沈線文→撚糸文	明赤褐 5YR 5／6	粗	並	頸部片	
2	001−09	縄文土器 深鉢	D3	SK1	底径 6.0	内面剝離 外ナデ	橙 7.5YR 7／6	粗	並	底部 1／4	
3	001−05	縄文土器 深鉢	試掘 No.1	SK1	底径 13.0	内外ナデ	橙 7.5YR 6／6	粗	並	底部 1／4	
4	001−08	縄文土器 深鉢	C4	SD3		内ナデ 外撚糸文	灰黄褐 10YR 4／2	粗	並	体部片	
5	001−07	縄文土器 深鉢	試掘 No.4			内ナデ 外縄文	暗褐 10YR 3／3	粗	並	体部片	
6	001−06	縄文土器 深鉢	試掘 No.3			内ナデ 外条痕	にぶい赤褐 5YR 5／4	粗	並	体部片	
7	001−03	土師器 台付甕	C3	SD3	台接合 4.8	内ナデ、外ハケメ 台部内面細かいハケメ	にぶい橙 7.5YR 6／4	粗	並	脚台片	
8	002−03	須恵器 杯蓋		排土	口径 14.0	内外ロクロナデ、ヘラ切り痕 一方向ナデ	内；灰 N 4／ 外；暗灰 N 3／	密	並	体部 1／3	
9	003−04	須恵器 杯身	C4	SD3	口径 10.0	内外ロクロナデ 外ロクロケズリ	暗青灰 5B 5／1	密	並	体部 1／3	
10	004−06	須恵器 高杯	D6	SD3		外ロクロナデ	灰白 2.5Y 7／1	やや粗	並	脚柱のみ ほぼ完存	
11	005−01	須恵器 甕	D6	SD3	口径 44.9	ナデ、口頸部にカキメ	黄灰 2.5Y 6／1	やや密	並	口縁部 小片	
12	006−01	須恵器 甕	D6	SD3		外；格子タタキ 内；同心円スタンプ	黄灰 2.5Y 6／1	密	並	胴部片	
13	007−05	須恵器 甕	D6	SD3		外；格子タタキ 内；同心円スタンプ	灰白 7.5Y 7／1	やや密	やや不良	体部片	
14	008−05	須恵器 甕	B5	SD3		外；平行タタキ、 内；同心円スタンプ	青灰 5B 5／1	やや密	硬	体部片	
15	001−01	土師器 小皿	C6	SD3	口径 7.8 器高 1.0	内ナデ→口縁ヨコナデ 底部外面オサエ	橙 2.5YR 6／6	粗	並	口縁部 1／4	
16	001−04	土師器鍋	D4	SD3		ヨコナデ、口縁部おりかえし	橙 5YR 6／6	粗	並	口縁片	
17	002−01	山皿	D6	SD3	口径 8.1 底径 5.0 器高 2.2	内外ロクロナデ、糸切り痕	灰白 5Y 7／1	やや粗	並	体部 1／2	
18	007−03	山茶椀	B5	SD3	口径 16.6	内外ロクロナデ	明赤灰 2.5YR 7／2	やや密	並	体部 1／6	
19	002−04	山茶椀	D6	SD3	口径 17.0	内外ロクロナデ	灰白 2.5Y 8／2	やや粗	並	口縁部 1／4	自然釉
20	002−02	山茶椀	D6	SD3	口径 16.0	内外ロクロナデ	灰白 10YR 8／2	やや粗	並	体部 1／3	
21	002−05	山茶椀	D6	SD3	口径 14.8	内外ロクロナデ	灰白 7.5YR 8／2	やや粗	並	体部 1／5	自然釉
22	007−02	山茶椀	D6	SD3	高台径 6.1	内外ロクロナデ、糸切り痕 高台貼り付け後ナデ	灰白 10YR 7／1	並	並	高台部から下半 体部1／2	
23	008−03	山茶椀	D6	SD3	高台径 8.4	内外ロクロナデ、一方向ナデ、 糸切り痕、高台貼り付け後ナデ	灰白 N 8／	やや粗	並	高台部 1／3	自然釉
24	004−04	山茶椀	E6	SD3	高台径 8.0	内外ロクロナデ、糸切り痕 高台貼り付け後ナデ	灰白 5Y 8／1	密	並	高台部 完存	モミガラ痕
25	004−08	山茶椀	D6	SD3	高台径 8.7	内外ロクロナデ 高台貼り付け後ナデ	灰白 5Y 7／1	密	並	高台部 1／8	
26	002−06	山茶椀	C6	SD3	高台径 7.2	内外ロクロナデ、糸切り痕、 高台貼り付け後ナデ	灰白 5Y 8／1	やや粗	並	高台部のみ	モミガラ痕 底部内側もりあがり
27	007−01	山茶椀	D6	SD3	高台径 7.0	内外ロクロナデ、 高台貼り付け後ナデ	灰白 10YR 7／2	やや粗	並	高台部から 体部1／2	
28	003−02	山茶椀	B3	SD3	高台径 6.2	内外ロクロナデ、 高台貼り付け後ナデ	灰白 N 7／	やや粗	並	高台部 1／4	モミガラ痕
29	004−03	山茶椀	D6	SD3	高台径 5.6	内外ロクロナデ、糸切り痕 高台貼り付け後ナデ	灰白 5Y 8／1	密	並	高台部 完存	モミガラ痕
30	004−01	山茶椀	D6	SD3	高台径 6.6	内外ロクロナデ、糸切り痕、 一方向ナデ、 高台貼り付け後ナデ	灰白 7.5Y 8／1	やや粗	並	高台部 1／2	モミガラ痕
31	004−05	山茶椀	D6	SD3	高台径 6.8	内外ロクロナデ、糸切り痕、 高台貼り付け後ナデ	灰白 5Y 7／1	やや粗	並	高台部 ほぼ完存	モミガラ痕
32	008−04	山茶椀	C5	SD3	高台径 6.9	内外ロクロナデ、糸切り痕、 高台貼り付け後ナデ	灰白 N 8／	やや粗	並	高台部 1／4	重ね焼き痕、自然釉
33	008−02	山茶椀	D6	SD3	高台径 8.6	内外ロクロナデ、糸切り痕、 高台貼り付け後ナデ	灰白 2.5Y 7／1	やや粗	並	高台部 のみ	自然釉
34	009−01	山茶椀系 鉢	D6	SD3	口径 25.4 高台径 14.0 器高 9.0	内外ロクロナデ、 高台貼り付け後ナデ	灰白 5Y 7／1	密	並	体部 1／4	自然釉
35	008−01	青磁 椀	D6	SD3	高台径 5.3	施釉、削り出し高台	灰白 5Y 7／1	密	硬	高台部から 体部下半1／3	草花文、緑色の釉
36	001−02	土師器 小皿	B6	包含層	口径 8.4 器高 1.6	内ナデ→口縁ヨコナデ 底部外面オサエ	黄橙 10YR 8／6	粗	並	口縁部 1／16	
37	004−07	山茶椀	D6	包含層	口径 15.0	内外ロクロナデ	灰白 5Y 7／1	密	並	口縁部 1／12	重ね焼き痕、自然釉
38	004−02	山茶椀	D5	包含層	高台径 7.4	内外ロクロナデ、糸切り痕、 高台貼り付け後ナデ	灰白 5Y 7／1	密	並	高台部 完存	
39	003−01	山茶椀	B4	包含層	高台径 8.0	内外ロクロナデ、糸切り痕、 高台貼り付け後ナデ	灰白 10YR 7／1	やや粗	並	高台部 1／2	モミガラ痕
40	003−03	山茶椀	B2	西側 排水路	高台径 7.6	内外ロクロナデ、 高台貼り付け後ナデ	灰白 N 7／	粗	並	高台部 1／2	モミガラ痕 SD3
41	007−04	山茶椀		表採	高台径 9.6	内外ロクロナデ 高台貼り付け後ナデ	灰白 5YR 8／2	やや密	良	高台部 1／4	重ね焼き痕、自然釉 調査区隣接地

第1表　遺物観察表

PL1

調査前風景（南から）

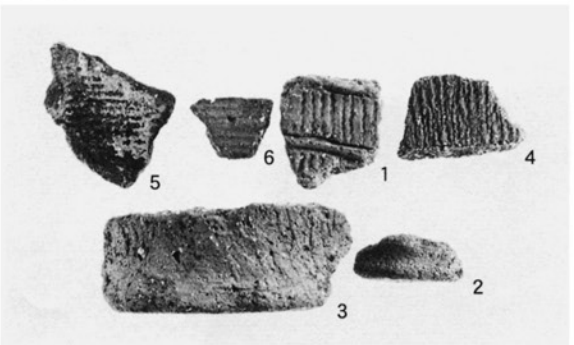
調査区全景（北から）



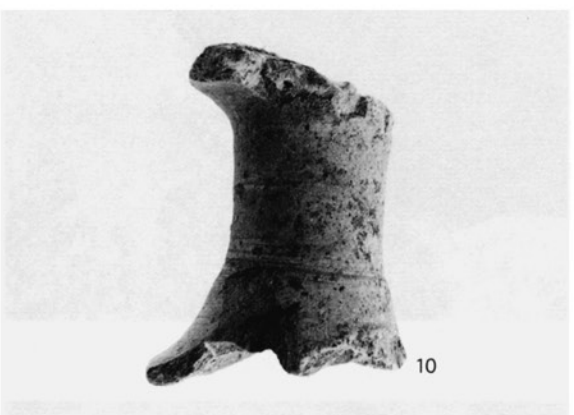
SK 1

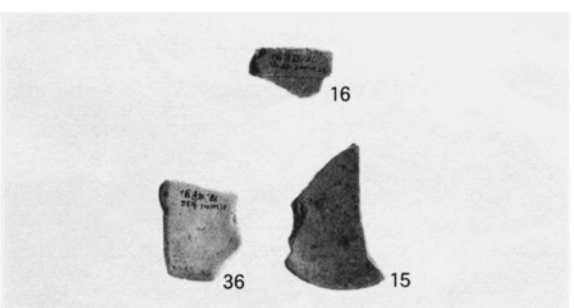
SD 3

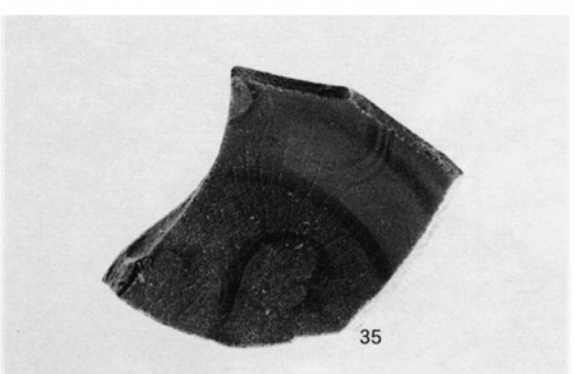
PL 3

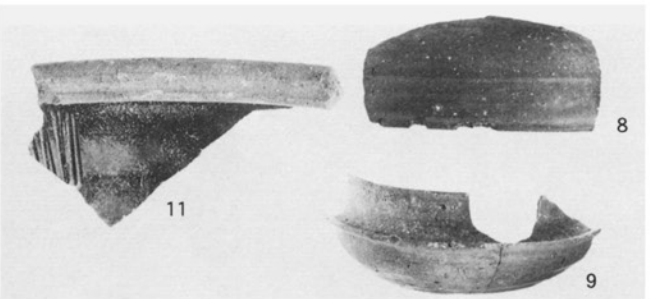

5
6
1
4
3
2

7

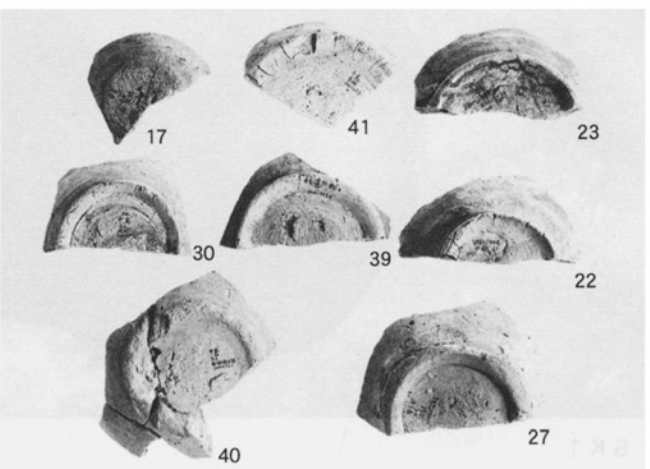

10

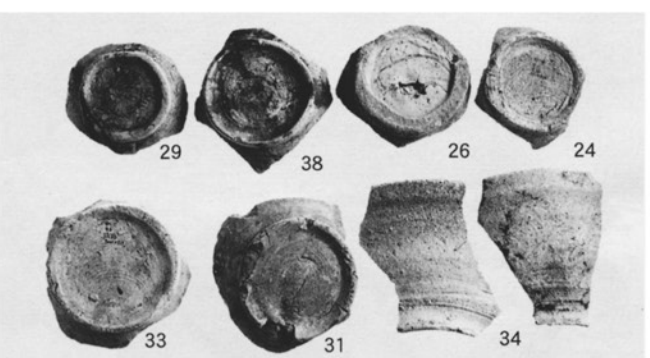

16
36
15

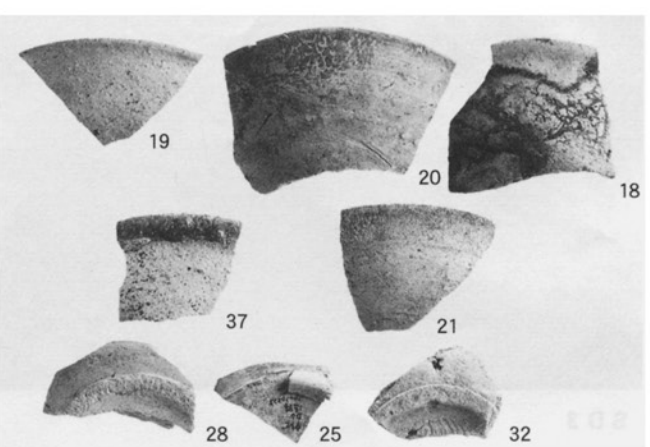

35


8
11
9

12
13
14


17
41
23
30
39
22
40
27


29
38
26
24
33
31
34


19
20
18
37
21
28
25
32

出土遺物

報　告　書　抄　録

ふりがな	なかとびいせき（だいにじ）はっくつちょうさほうこく
書　　名	中鳶遺跡（第２次）発掘調査報告
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	２２７
編集者名	河北秀実　萩原義彦　黒田聖也　伊藤直孝　新庄孝敏　山﨑博史　松見直茂
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所 在 地	〒515－0325　三重県多気郡明和町５０３　　Tel　0596(52)1732
発行年月日	２００２年３月３１日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
なかとびいせき 中鳶遺跡	つし 津市 おおさとくぼたちょう 大里窪田町 あざなかとび 字中鳶	24201	４７７	34度 46分 04秒	136度 29分 41秒	20010511 ～ 20010605	400㎡	（一）三宅一身田線停車場県単道路改良工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中鳶遺跡		縄文時代	土坑ＳＫ１	深　鉢	
		中世	流路ＳＤ３	土師器 山　皿 山茶椀 青磁椀	

平成 14(2002) 年 3 月に刊行されたものをもとに
平成 19(2007) 年 11 月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告　２２７

中鳶遺跡（第２次）発掘調査報告

２００２年３月発行

編集・発行　　三重県埋蔵文化財センター

印　　刷　　オリエンタル印刷株式会社